

理学部の教授室から南極観測を見る

－ 送り出す側から －

尾池和夫（1963 年卒）

元号が平成になる直前、防災研究所から地球物理学教室に移った。そのときから、南極とどのように関わってきたかを思い出してみる。

まずは、1989 年 1 月 1 日の南極事情を日記から引用する。今では、インターネットで結ばれているが、20 年前には連絡がたいへんだった。

元日の午前、屠蘇を祝い、雑煮をいただくとしてしていると、チャイムが鳴った。何回もせわしげに押す。出てみると、NTT の電報配達の人が、明るく大きな声で、

「明けましておめでとうございます。南極から電報です」

大きな鶴の模様の封筒に入った年賀電報を開くと、「受付局ナンキョク」とある。昭和基地で越冬している市川信夫さんが年賀電報を送ってくれた。はるばると電波に乗って届いた、今年最初のメッセージだ。

さっそく、こちらからも年賀を送ることにして、115 を呼ぶ。

「南極昭和基地へお願いします」

こちらの電話番号と名を伝えて、一度切る。すぐNTT からかかってくる。

「家族番号をお持ちでしょうか」

「いや、一般でお願いします」

「無線電報で高くつきますが」

「かまわないですよ」

「それではどうぞ、宛名から」

「南極昭和基地、イチカワノブオ様」

「電文をどうぞ」

「アケマシテオメデトウ／ゴケンコウライノル／オイケ」

「940 円です」

暖かいわが家の部屋から、はるか南極地域までメッセージを運んでくれるのだから安いものである。

越冬隊員たちは、南極の長くて暗い夜、つまり冬を体験したのち、今は観測や調査活動で忙しい。もうすぐ到着する第 30 次南極地域観測隊を迎えるためにも、彼らは、いろいろの準備作業を今のうちにやっておかなければならない。

この年、1 月 7 日、土曜日、昭和はこの日で終わり、元号は南極昭和基地の名前に残った。

1990 年 12 月、大学院生の金尾さんが南極へ行くので、その期間だけ京都大学の助手のポストを借りて就職するという。そこで、専攻主任から教務掛に連絡してもらった。越冬隊員は国家公務員でないといけないというので、特別処置としてこのような便法をとらないと、院生の極地越冬はできないという制度である。金尾さんが南極へ出かけるのは、1991 年の 12 月頃である。何人もの院生がこの方式を使って越冬した。

1997 年 1 月 16 日（木）、学生たちに南極への関心を持ってもらうために、極地研の神沼

克伊さんを招いて南極のことを講演してもらったが、出席者は数名であった。しかし、東京の大学では隊員があまり出てこないで京都大学の役割が大きい。

1997年3月8日（土）、12時ちょうどに学部入学試験の合格者を発表した。これは遅れてもいいが、早いと絶対にいけないことになっている。その日、極地研究所の渋谷和雄さんが越冬隊長として来訪し、東野陽子さんと中西一郎さんと会談した。以下は、東野さんが南極へ行くための手続きである。

1997年5月29日（木）、地球物理学教室の教授懇談会。東野さんの助手任用を了承してもらった。その前に大学本部から助手のポストを一時的に借りてくるなど、さまざまな準備がすでに行われている。以下は、公式の記録である。

1997年6月19日（木）、教室会議で東野陽子さんの助手人事を行う。

1997年7月3日（木）、大学院の研究科会議の日。主任会議で、東野さんの助手任用が決まった。

1999年3月31日（水）、東野さんは越冬隊員の役目を終えて帰国した。明日からまた学生である。職員が異動したり、さまざまな人の出入りがあって、桜を見ながら酒盛が続く。

1999年6月1日（火）、地球惑星科学Iの講義を第5時限目に行く。50人ほどの学生から手応えを感じた。東野さんが持ち帰ったカップヌードルの容器を見せた。400メートルほどの深さの水中に静かに沈めたもので、直径が5cmほどに縮んでしまっている。静水圧場を実感してもらうためである。何人もの学生が教室に残って質問をしたり、議論をしたりして楽しい。

1999年10月29日（金）、東野さんたちの越冬記録の本が岩波書店から出るようになった。わたしは、入院日記をそのころ本にすることが決まり、原稿に取りかかっていた。

2000年7月25日（火）、東野さんたちの本が発売になった。

2002年3月30日（土）、岩野祥子さんが南極観測越冬隊の仕事を終えて帰ってきた。重力の観測を担当した。来年あたりに越冬したいという院生が続いている。

2005年5月25日（水）、幕張での地球電磁気・地球惑星圏学会で、男女共同参画連絡会合同大会があり、「地球惑星科学における男女共同参画」という題で20分講演した。前田佐和子さんが司会。基調講演は坂東昌子さんが行った。

研究室のメンバーの中から、南極昭和基地に初めて女性の越冬隊員を送り出した。わたしが仕組んだわけではないが、研究室での何気ない会話の中からその歴史が発生したという切り出しで東野さんの例を紹介した。以下は、そのときの内容である。

そもそも南極昭和基地は、おどろくべき男性社会として生まれ育ったように、わたしには見えていた。自分が学生のときにあこがれた越冬隊のことを、西堀栄三郎さんの本で読んだり、隊員だった地球科学分野の先輩たちから聞く話で、男性社会の現実に触れた印象が強かったからだろうと思う。

女性が越冬するには関係者の意識改革から基地の整備まで、ずいぶん多くの努力が長期間にわたってなされたと思う。そして東北大学から坂野井和代さんと京都大学から東野陽子さんが、1997年11月から1999年3月の期間、第39次南極観測隊に参加した。1957年1月29日、永田武さんが昭和基地と命名して始まった日本の南極観測で、越冬する初めての女性たちだった。坂野井さんは、越冬したとき結婚しておられたし、東野さんは今では2人の子育てをしながら、仕事しておられる。

東野陽子さんが参加するにあたって、その準備のための人事を行う会議で、昭和基地にもようやく女子トイレができましたと報告したら、その後ですぐ、京都大学の天文台に女子トイレがないのを、研究科長として知っているのかと職員から問われて、絶句してしまった。このことも京都大学の中での男女共同参画のことを考えるきっかけになった。

毎年わたしは干支をテーマに年賀状の絵を描くが、2005年は1万円札の鳳凰を反転して対に直して、鳳と凰とで男女共同参画社会の実現を願った。子育てをしながら地球惑星科学に挑んでいる東野陽子さんに、大学でも保育所を充実しようかと意見を求めたら、遠くから通っていて、職場の保育所に連れて行くより、近所の保育所を利用する費用をもらう方がいいと言われて、なるほどとまた考え込んでしまった。

2007年6月30日(土)、南極OB会京都支部の南極観測50周年記念事業講演会「南極：探検、観測、そしてこれから」で開会の挨拶を百周年時計台記念ホールで行った。

2008年9月2日(火)、東京で松浦ユネスコ事務局長と面談した。ANA インターコンチネンタルホテル 6階 610号室である。外務省国際文化協力室の安東室長、文科省国際統括官付他の方たちが同席した。日本ジオパークをスタートして、変動帯の特徴を出したいと協力要請したが、そのついでに、ユネスコは5大陸を基本に活動しているが、6大陸で南極を含めて世界を描くようにしてほしいと、わたしの意見を述べた。

2009年9月17日(木)、佐藤 薫さんの話を聞いた。その中で彼女は、中緯度・熱帯から極域へと研究の範囲を広げていったとき、ちょうど東野陽子さんの帰国講演を聴いて、南極を身近に感じ、自分も行ってみようかという気になったと思い出を話してくれた。南極での大型大気レーダー建設は夢のような話だということを頼もしく思いながら聞いた。

これからも、極地の研究に関心を持ちながら、何らかの形で貢献していきたいと考えている。

文献1：坂野井和代・東野陽子、「南極に暮らす」(岩波書店)、2000年

文献2：西堀栄三郎、「南極越冬記」(岩波新書)、1958年